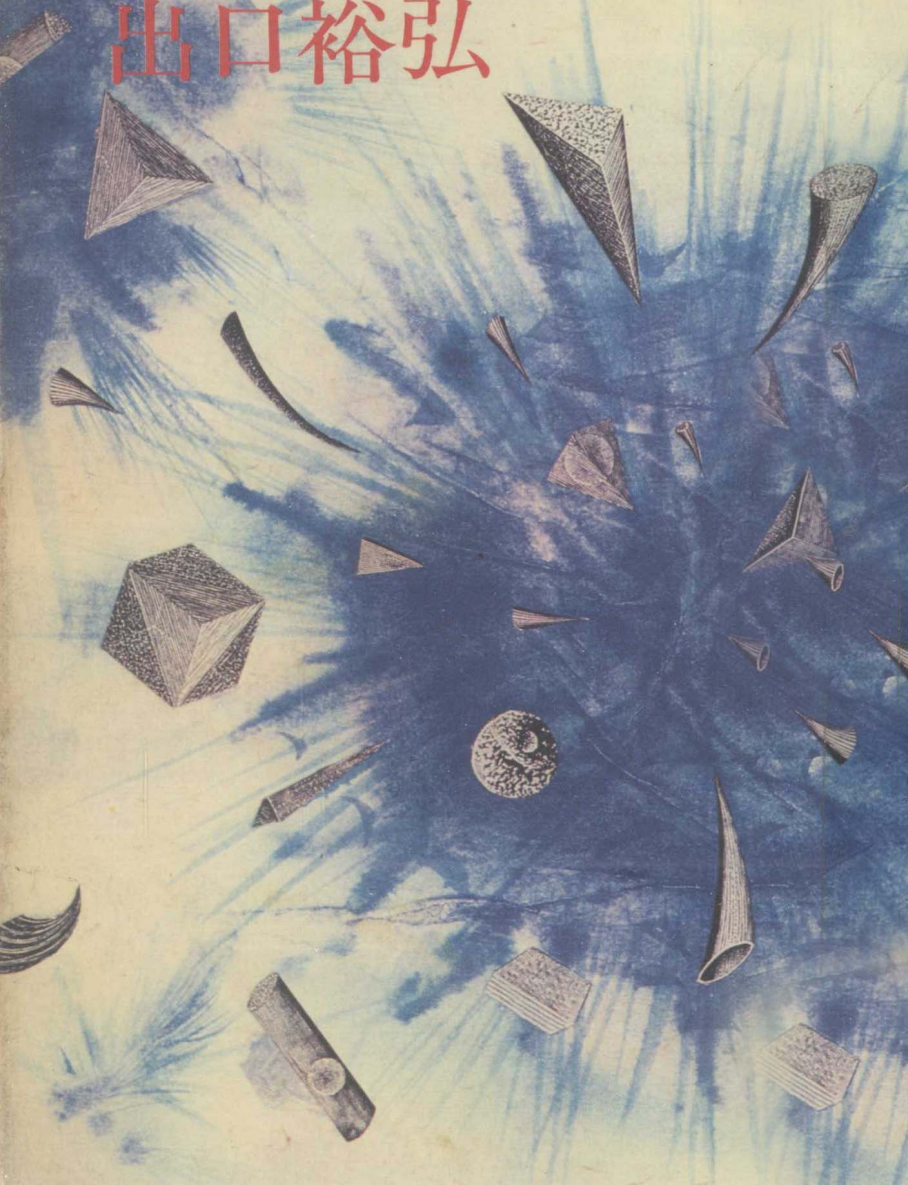


# 風の航跡

出口裕弘





# サロメの乳母の話

塩野七生

中央公論社

サロメの乳母の話

定価一〇〇〇円

昭和五十八年三月十日 初版印刷  
昭和五十八年三月二十日 初版発行

著 者 塩野七生

発行者 高梨 茂

印刷 精興社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目七

番 振替東京 二二三四

©一九八三 検印廃止

サ  
ロ  
メ  
の  
乳  
母  
の  
話

|            |     |
|------------|-----|
| 貞女の言い分     | 9   |
| サロメの乳母の話   | 29  |
| ダンテの妻の嘆き   | 48  |
| 聖フランチェスコの母 | 66  |
| ユダの母親      | 86  |
| カリグラ帝の馬    | 104 |

サロメの乳母の話  
目次

装幀  
野中  
ユリ

大王の奴隷の話

123

師から見たブルータス

142

キリストの弟

160

ネロ皇帝の双子の兄

181

饗宴・地獄篇 第一夜

202

饗宴・地獄篇 第二夜

221



サロメの乳母の話

武勇の持主とつとに評判のアキレス、智恵に優れたビュロスの君主ネストルなどのような、ギリシア中に名を知られた殿方と一緒に戦えるのが、大変に嬉しいように、ギリシア軍の総大将アガメムノンからの参加を推める使者を迎えてから、出陣の前日まで、まるで酔ったように、わたくしに向って同じことをくり返したものでした。

「ペネロペ、これは、わたしに神が与えてくださった絶好の機会なのだよ。

男には、その生涯に、一度は必ず、神がその才能を発揮する機会を与えてくださる。わたしにとっては、このトロイ攻めだ。

わたしは、誓って、この神の恵みを見事に返してみせるからな。見ていてくれ。ギリシア全土に、イタケの王のオデュッセウスの名をとどろかせてみせる」

そう言う夫の眼の輝きは、何年か前に、スパルタにいたわたくしのところに来て、

「片田舎だと思わないで、イタケのわたしのところに嫁いでください。あなたを、絶対に幸福にしてみせる。オデュッセウスの妻ペネロペの名を、人々が口にする時、敬意と憧れが、それらの人々の心の中にまき起るようになってみせるから」

と言った時と、まったく同じでした。あの人は、それがなんであらうと、ある

## 貞女の言い分

二十年！

なんと二十年間でございますよ、夫のオデュッセウスが、家をあけていたのは。そのうちの十年が、トロイの戦場で、あとの十年間が、神々の怒りによって放浪させられたためで。というわけで、合計二十年間も家にもどって来なかった夫を、浮気もせずに貞淑に待ったのがこのわたくし、ペネロペ、女の鑑というわけでございます。

夫のオデュッセウスが、イタケの島の男たちを引き連れて、トロイを攻めに行くギリシア連合軍に参加するために発って行ったのは、二十年も昔のことでも、まるで昨日起った出来事のように、眼の前にあざやかによみがえってまいります。夫は、アルゴスの王アガメムノン、スパルタの王メネラオス、ギリシア第一の

に、アジア最大の豊かな都トロイを攻め、その富をわがものにしたということにあったのも、オデュッセウスには、わかりすぎるぐらいにわかっていたのです。ですから、オデュッセウスが、アキレスのように、もう名を知らせる努力も必要なほどの、名声に輝く人であったならば、アガ멤ノンからギリシア軍参加を乞われたアキレスが、女装して女たちの中に隠れなどして、参加をためらったように、オデュッセウスだって、ああも簡単に、しかもいそいそと、トロイに出かけては行かなかったにちがいありません。でも、オデュッセウスは、ギリシアの辺境と言ってもよい、小さな島イタケの領主。常日頃から、自分の才能は、この小さな世界では生かしきれないという、あせりを感じていたようでございます。トロイ攻など行きたくないと言うアキレスを、策略をめぐらせて、参加にふみきらせたのも、夫のオデュッセウスでございます。

ギリシア連合軍にアキレスが参加するかしないかは、総大将のアガ멤ノンにとっては、ギリシア軍の戦力を左右する重大問題でしたが、オデュッセウスには、それだけではありませんでした。ギリシアの英雄アキレス不参加のギリシア軍など、オデュッセウスが、生涯一度の男の勝負をしようとする場として、なんとしても画竜点睛を欠くというものです。オデュッセウスにしてみれば、このために

一つのことゝ夢中になると、相手の心まで酔わせてしまうようなところがあるのでございます。

そんなオデュッセウスにとっては、総大将アガメムノンや副大将メネラオスが、アジアの最大の都トロイを攻めるこのたびの戦争を、ほんとうはどのような気持ちではじめたかなど、無関係なことであつたにちがいありません。「トロイ戦争」という、全ギリシアと、アジアを代表するトロイとがぶつかる歴史的な出来事に、自分も参加でき、イタケの領主でくすぶつていたオデュッセウスも、その晴れの場で、持てる力を充分に發揮できそうだという期待だけが、夫の心を占めていたのですから。

もちろん、頭の良いオデュッセウスのことでございます。トロイの王子パリスと道ならぬ恋に落ち、夫も故国も捨てて若い恋人と逃げたスパルタの王妃ヘレナを、取りもどそうとしてトロイに軍を進めるスパルタ王メネラオスには、王妃への愛など少しもなく、ただ、体面を傷つけられた憎しみしかないことも、充分に知っていたことでございましょう。また、メネラオスの兄、アルゴスの王アガメムノンが、ギリシア全土にトロイ攻撃の軍の結成を呼びかけた真意が、特別に仲が良かったわけでもない弟に、名誉を回復してやろうというのではなく、この機

一緒のわたくしでさえ、一日ごとに新しく気づくことばかりで、子を持った母親の幸せを、充分に味わう毎日でした。

よく言うではありませんか、女は子を持つと、夫のことなど頭から消えてしまうものだ。大きな声では言えませんが、わたくしにも同じようなことが起ったのです。成長していく息子を眺めていると、かつてはあんなにも大切に思っていた夫が、それほどでもない存在に変わっているのに、自分自身で驚くというふうなことが。戦場にあるオデュッセウスの安否が、気にかからなかったわけではありません。ただ、オデュッセウスという夫は、遠くにいてもちゃんとやっていけると、妻に思わせるタイプの男なのです。あの頭の良い人が、そう簡単に死ぬわけがない。これを信頼と呼ぶのか、それともなんと呼ぶのか、なにしろそんなふうな感情を、妻が持つしかない夫なのだからしかたがありません。

それでも、夫のオデュッセウスは、遠いトロイの戦場から、伝てを見つけては、わたくしにいろいろな知らせを送ってきました。

トロイ戦争は、ギリシア人とトロイ人が戦っているだけでなく、オリンポスの神々も、二手に別れて戦っており、トロイ側には、アポロンとヴィーナスが味方し、ギリシア軍には、アテネとジュノーとが応援しているのだということ。

も、どうしたってアキレスには、参加してもらわねばなりません。それで、アガムノンまで感謝するほど、アキレス参加を実現するために努めたのでございます。

まったく、わが夫ながら、あの人の頭の働きの複雑さには感心してしまいます。智恵の女神アテネの大的御氣に入りとの評判も、なんだかほんとうではないかと思ってしまうほどに。

でも、そのためか、妻のこのわたくしまだが、裏の裏の裏を見る、オデュッセウス式ものの見方に、染まってしまったようでございます。夫婦ともなると、どうしたって互いに似てくるものなのでしょう。詩人ホメロスは、わたくしの名を歌う時に、<sup>さと</sup>聡い心のベネロペは、というふうに、聡いという形容詞をつけたほんです。女にとって、それほど嬉しい形容ではないと思うけれど。

トロイ戦争の十年間は、イタケの留守宅を守るわたくしにとっても、嬉しいことの多い、それだけに長いとは思わなかった十年間でございました。

夫が出陣した後、まもなく生まれた息子のテレマコス育てるのに、夢中であったためもありましょう。健康に心優しく育つテレマコスの成長ぶりは、いつも

ております。そして、有名な木馬の計についても、得々と、こんなふうに書いてまいりました。

「わたしが考案し、船大工のエベイオスに命じてつくらせた大きな木馬は、眺めるだけでも見事なものだった。

わたしは、その木馬の中に、ギリシア軍の中でもとりわけ勇敢な兵士たちを選んで隠した。そして、それを、夜中秘かに、トロイの城門の前に捨て置かせた。残りの全軍は、退却するふりをして船に乗り、浜辺から離れ、トロイのどんな高い塔から見えない、近くのテネドスの島に隠した。

明け方、木馬を発見したトロイ人たちは、附近にギリシア軍の姿も見えないところから、木馬をかこみ、口々に言い合っていた。

敵兵が隠れているかもしれないから、槍で木馬の脇腹を突いてみよう、と言う者がいた。

また、高い崖の上に引いて行って、岩から投げ下ろそう、と言う者もいた。

その他に、これは神々をなだめる捧げ物として、ギリシア人が置いていったにちがいないから、城壁の中に入れて、祭りをすべきだ、と言う者もいた。

こういう外の言い合ひは、木馬の中にいてもよく聴こえたのだ。結局、トロイ